

文化映画

紹介

渡部実

「二つの崩れた家族—飲酒が車を凶器に変えた」 映学社/オムニバス・ジャパン作品
「ストーンエイジ—Stone age—」 シー・メイクス作品

二つの崩れた家族—飲酒が車を凶器に変えた

【スタッフ】製作/武田佳典、高木裕己 脚本・監督/高木裕己 プロデュース/佐野道夫、落合信人 撮影/西岡章 照明/田久保剛 録音/岩丸恒 音楽/加藤由美子 編集/高木裕己 助監督/斉藤克康 制作主任/川下和裕 出演/宮川一朗太、長谷川真弓、勝沼璃歩、九太郎、岩崎聡子、前田幸恵、芹沢孝子、新井量太、越村公一、大門裕明、林田麻里、岸端正浩ほか 撮影協力/市原刑務所、医療法人社団愛友会・三郷順心総合病院、ビッグ築地、サン・フラワー24h託児所、S.K市民共済 完成/07年 ビデオ作品・30分

「内容」最近、自動車の飲酒運転による死亡事故がニュースで取り上げられることが多い。故意の殺人事件とは異なり、一般人が飲酒運転をしたばかりに通行人をはねて怪我をさせた、あるいは死亡させたというケースが社会問題となっているからである。死亡事故の場合、量刑が軽すぎるという議論も聞かれるようになった。この映画はドラマによって、加害者の立場から飲酒運転の問題の大きさ、深刻さを指摘している。

大手研究機器メーカーの開発部課長が、夜、会社の部下や上司たちとお酒を飲んで、酩酊気分で携帯電話で妻に帰宅の連絡をする。妻は以前、飲酒運転で事故を起こした夫のことを心配し、自家用車での帰宅は避けて、タクシードリナーに注意した。それにもかかわらず、夫は自家用車で少しの時間、うたた寝をしてから車を走らせた。まだ酔いはさめていない。自家用車とは利用者本人にとつてとても快適に作られている。エアコン、カー・ステレオ、安定した乗り心地。全てが本人の趣向に合わせて作られている車なのだ。その車に乗った夫であるが、運転する本人が酩酊していたばかりに自転車に乗っていた若い女性をはねてしまった。女性は病院で死亡した。

ここから連続ドラマも吹き飛ばような状況設定が用意される。夫は交通事故の前科があるために実刑判決を受ける。被害者の遺族への慰謝料は1億円を超えた。当然、夫は会社を解雇されたが、そればかりではない。当日、夫に飲酒を勧めた会社の人間や飲食店やカラオケ店の責任者にも補助の容疑がかかるのだ。お酒の好きな人にはこれから要注意の事例である。

題名の「二つの崩れた家族」とは言うまでもなく、加害者と被害者双方の家族のことであるが、飲酒運転による過失致死の事故は当事者の夫が勤める会社の信用、また家族に対する風評も強く、一家離散もあり得ない話ではないと言う。過失の事故はいつ偶発的に起こるか分からない。あの夜、

タクシーで帰宅すれば良かったという反省は既に遅いものかも知れないが、この映画は事故の前と後の当事者たちの状況を、具体的かつ簡潔に描き、社会人である大人に飲酒運転の危険性をあらためて伝えている。

（問合せ先）映学社 TEL03-333591972

ストーンエイジ —Stone age—

「スタッフ」製作／鶴飼伸



「二」の撮られた教室



「ストーンエイジ」

行、杉山文彦、藤井淳史、プロデューサー／前島良行、中橋真紀人、鶴岡大二郎、脚本／河田秀二、原作・脚本／白鳥哲、撮影監督／大久保礼司、ラインプロデューサー／萩原淳、助監督／猪腰弘之、音楽／南雲和晴、美術／橋本高子、装飾／櫻井啓介、録音／甲斐田哲也、整音／坂上賢治、編集／森隆倫、出演／黒田勇樹、佐藤藍子、柴田理恵、北村有起哉、寺田農、北村和夫ほか、完成／05年 35ミリ・

109分

「内容」かわってこの映画の主人公は、10代の頃にひきこもりの体験がある22歳の青年である。その青年、古賀誠也は、ひきこもりの記憶と経験を生かして、今、社会福祉士を目指し、かつて自分のような境遇に置かれていた人々の集うフリースペース「ひまわりの家」にスタッフとしてやって来た。この家にはさまざまな境遇にあった人々がいることに誠也はあらためて驚く。その中で彼は、5年間ひきこもりを続けている25歳の青年と出会う。2人はあまり年齢も違わないので、誠也は同じ経験を持つこの青年を何とか助けてやりたいと思い、青年のよき話相手になろうと努力をする。しかし、心の病を抱えた青年の信頼と友情を得ることは誠也にとってもなかなか難しいことだった。

この映画の大半の部分は青年に献身的に尽くす誠也の行為の描写に占められて

いる。ひきこもりの原因は、昔、いじめられた経験であるとか、さまざまなものがあると思うが、本人が表に出て積極的に語ってくれないので、その本当の原因を探し当てるのは難しい。言葉と行動が一致するとも限らない。この映画は誠也と青年が同じひきこもりの経験者という点で、非常に間に流れている。

原作者でもあるという白鳥哲監督（1972年生まれ）は、どのような思いをもってこのような映画を作ったのだろうか。白鳥監督本人の経験が反映されているのだろうか。いずれにしても大人の側からみれば、20代という年齢はまだ若い。誠也と青年の精神の彷徨という点、本当の自分を発見する旅を描くこの映画には、かなり独特のパーソナルな「時間」も流れているように見える。それゆえにドラマの展開がいささかもどかしいと感じるところも

あるが、注目すべきは誠也を演じた若き俳優、黒田勇樹（1982年生まれ）の好演だった。ひきこもりといっても、恐らく原作や監督の描く世界とはまた異質の世界。言い換えると俳優・黒田勇樹ならではの個人的な世界がここにあると思われる。

この映画は黒田の出演という点もあり、山田洋次監督の「学校」シリーズを想起させる要素も感じられる。このような言い方は誤解を受けそうであるが、この映画はひきこもりという心の病いをテーマとして、定まったメッセージを流すというよりも、作者と俳優がそれぞれの立場で試行錯誤を繰り返しながら何かを模索し発見しようとしている映画に思われる。私はそのような印象を持った。（全国的に自主上映を展開中。問合せ先）同映画上映事務局 TEL03-3351117011